

予言者イエレミアの哀歌

本書は前のイエレミア予言書と密接な関係を有し、一種の「続き」もしくは「結び」と称し得るほどである。収録する所の歌は一章ずつ五つで、人の死を悼む歌の体裁に倣つて、イエルサレムの荒廃およびユダ王国の一時的滅亡を悲しみ嘆いたものである。

本書は名称をヘブレオ語原典ではキノト、ギリシャ語本では Κοντότερον、ラテン語本では Lamentationes ラメンタチオネスとい、主要祝日にイエサルレム聖殿で朗読されたいわゆるメギロト、すなわち祝祭用卷物五つの中に加えられている。

これはキナの詩形で書かれた悲しみの歌で、第一、第二、および第四章に各々二十二節ずつあり、「箴言」第三十一章の「強き女」に対する贊辞のように、各節の始めに順次ヘブレオのアルファベト文字があるが、第三章には前述各章のより短かい節が六十六あり、その三つずつの始めにそういう文字がある。

イエレミアの哀歌はユデア教でもキリスト教でも、すべての時代を通じて聖書正典中に数えられ、主の御苦難御死去を悼む悲しみの歌として、聖週間の最後の三日における朝課の核心をなしているものである。

イスラエルが引き行かれて捕囚の身となり、イエルサレムが荒廃したる後のことなりき、預言者イエレミア坐して泣き悲しみ、イエルサレムに就きてこの哀歌を作り、心の傷むあまり嘆き叫びて云いけるは、※

第一章

哀歌一

一 アレフ。曾ては民草に充满ちたりしこの都、今は寂しき状して坐ること如何にぞや。① 諸国民の女王は寡婦の如くになり、²⁾ 諸州の君侯は貢を奉る者となれり。③ ベト。彼女は終夜泣きに泣きて、その頬に涙あり。その愛したりしすべての人の中にも、之を慰むる者なく、その友は皆之を蔑みて、敵となれり。⑤ ギメル。ユダは患難と労役の甚だしきとに由り、⁶⁾ 去りて異邦人の間に住いたれど、安息を得ず、その追手等みな、

※この前書きはヘブレオ語、カルデア語、シリア語諸本になく、ラテン語本にさえ以前には全く見当たらなかつた。

第一章 ① 哀悼歌風に。

② イエルサレムが寡婦になつたとは、その靈的配偶者たる天主に捨てられたから。③ 賦役をしなければならぬ。④ 夜には普通少しは休めるのに耶一三・一七。⑥ カルデア人の恐ろしさに、

狭間にて之を捕えたり。四ダレト。シオンの道は祝祭に来る者なきが故に悲しみ、その門は悉く毀れ、その司祭等は嘆き、その処女等は憂愁に悴れ、⁷⁾ 彼女自身も苦痛に圧し拉がれたり。五ヘ。その仇は頭首

六
七
八
九

となり、その敵は富むに至れり、そは主その不義の多きが故に、之を窘め給えるなり。その子等⁸⁾ は压制者の面前に引かれて捕囚の身となれり。六ワフ。かくて娘シオンよりはその美麗さ全く失せたり。その諸侯は牧場を見出さぬ牡羊⁹⁾ の如くなりて、之を追う者の面前に力なく去れり。セザイン。イエルサレムはその民仇の手に落ちて、助くる者もなき時に至り、その患難の日と昔日より有ちたりし諸種の望ましき物の失せたるとを思い出でたり。仇なす者等之を見て、その安息日を嗤えり。八ヘト。イエルサレムは罪に罪を累ねたり、この故にそは落ち付かずなれり。¹⁰⁾ 曾て之を頌栄めたる者等も皆、その名を汚せるを見

て、之を蔑めり。また彼女自身も嘆きつつ後を向きぬ。九テト。その

八
九

殘留者たちもエジ
プトに逃げようと
した。

7) 司祭たちや処女
らが、歌や音楽で
祝祭を莊嚴にする
のが慣いであつた
8)かれらさえ決して容赦されずに。
9)ヘブレオ語本は
「鹿」。—10)捕らわれ引き去られたのは罪に対する罰。

汚穢はその足に11あり、彼女は己が終末を心に留めざりき。その零落れた
 ること甚だしけれど、慰むる者だになし。主よ、わが患難を照覽し給え、
 そは敵勝ち誇れるに由りてなり。10ヨド。仇はそのあらゆる望ましき物に
 手を伸べたり。實に彼女はその聖所に、異邦人等の押し入るを見たり、し
 かも是等は汝がその会に入るべからずと命じおき給いし者等たりしなり。12
 ニカフ。その民は皆嗟きてパンを求む。彼等は生命を維がん為に、その宝
 を悉く抛ちて食物に代えたり。主よ、照覽し給え、我賤しくなりたれば、
 眷顧13給え。ニラメド。ああ、汝等すべて路行く者よ、注意して見よ、わが
 苦痛の如き苦痛ありやを。そは主の激怒の日に曰いし如く、我を葡萄宛
 らに摘み採り13給いたればなり。ニメム。彼高処より火を遣りてわが骨に
 入れ、我を懲治し、わが足下に網14を張りて14我に後を向かしめ、我を淋し
 からしめ、終日憂愁に憹れしめ給えり。14ヌン。わが数々の不義の輒は片
 時も離れたることなし、是等は主の御手に組合されて、わが頸に載せられ

11ヘブレオ語
 本「その衣の
 裾に」。12申
 結四四・七一
 九参照。

13町を摘み取
 るとは、全く
 荒らすこと。
 耶四九・九參
 照。一14逃れ

ることができ
 ないようすに。
 耶四九・九參
 照。一14逃れ

たり。わが力は弱れり。主は我が脱れて起つこと能わざる手に、我を付
し給えり。¹⁵⁾ 一五 サメク。主はわが中よりわが豪勇の士を悉く取り去り、わ
が精銳を蹂躪るべき時を麾きて、¹⁵⁾ 我を討ち給えり。主は処女なる娘ユ
ダを搾る酒搾を踏み給えり。¹⁶⁾ 一六 アイン。この故に我嘆きてわが眼水を
落す、そはわが靈魂を蘇らしむべき慰安者、我を距ること遠ければな
り。わが子等は敵の力優れるに由りて、滅ぼされたり。¹⁷⁾ 一七 フエ。シオ
ンはその手を差し伸べたれど、之を慰めんとする者なし。主ヤコブを攻
むるにその周囲にあるその敵に命じ給えり。イエルサレムは彼等の間に
ありて、月経に汚れたる如くなれり。¹⁸⁾ 一八 サデ。主は正しく在す、そは
我その御口に逆らいて御忿怒を招きたればなり。すべての民よ、乞う、
聽け、わが苦痛を見よ。わが処女等とわが若者等とは捕われ行けり。
一九 コフ。我わが友¹⁹⁾ を呼びしかど、彼等は我を欺きぬ。わが司祭等やわ
が長老等は、その生命を支えんとて、己が食物を探し求むる間に、邑に

15) イエルサレム滅亡に対する敵の祝い。 — 16) イエルサレムの若い人々は葡萄の房のよう切り取られ、剿滅の罰の「きかぶね」に投げ入れられた。 — 17) 耶一四一二・一七。 — 18) 利一五・一九以下など参照。

19) イスラエルが前に盟約を結んだ諸民族。

二〇

て憊れ仆れたり。ニーレス。主よ、照覧せ、我惱み、わが腹九回し、わ
が心わが胸裡にて動顛せるを。そは我に悲嘆充滿ちたればなり。外には
剣の殺すあり、内にも等しく死あり。ニーシン。彼等はわが嗟くを聞けり、
されど我を慰めんとする者なし。わが敵皆わが不幸を聞き、汝の然なし
給えるを悦べり。汝は慰藉の日を来らしめ給えり、彼等もまた我の如く
にならん。²⁰⁾ 三タウ。彼等の惡事をして、悉く汝の御前に現れしめ、わ
が諸々の不義ゆえに我を葡萄宛らに摘み採り給える如く、彼等をも摘み
採り給え。實にわが嗟きは多くして、わが心は悲しめり。

二二

哀歌二

第二章

一 アレフ。主御激怒のあまり、如何に晦冥もてシオンの娘を蔽い給える
ぞ。彼は榮あるイスラエルを天より地に墜し、その御激怒の日には御
躬らの足台りを憶い給わざりき。ニベト。主はヤコブの見榮美しきを

²⁰⁾ その時にはかれらも、今われに加えるのと同じ罰を受けるだろう。耶五〇・二七参照。

第二章

① 契約

の欄。広い意味では聖所。代上二八・二参照。

悉く、²⁾ 俄に滅ぼし去り、御激怒のあまり処女ユダの砦を毀して地に倒し、その王国とその諸侯とを汚らわしきものとなし給えり。³⁾ 三ギメル。彼その激しき御忿怒のあまり、イスラエルの角⁴⁾ を全く折り碎き、御右手を敵の面前より引退け、⁵⁾ 周囲を焼き尽す焰吐く火の如きを、ヤコブに放ち給えり。四ダレト。彼敵の如く御弓をひき、仇の如く御右手を固め、娘シオンの幕屋に在る眉目美しき者を悉く殺し、火の如く御憤りを注ぎ給えり。五へ。主は敵の如くなり給えり、イスラエルを俄に滅ぼし、その石垣を悉く俄に倒し、その塞を崩し、辱しめられたる男と辱しめられたる女ともて娘ユダを満たし給えり。六ワフ。且、園の如くその天幕⁶⁾ を荒らし、その幕屋を毀ち給えり。主はシオンにて祝日と安息日とを忘れしめ、王と司祭とを恥辱と激しき御義賞とに付し給えり。ザイン。主はその祭壇を棄て、その聖所を呪い、その塔の石垣を敵の手に付し給えり。彼等は祭の日の如く、主の家にて声⁷⁾ をあげた

「ヤコブの牧場を悉く」。³⁾ 天主は彼らを異教徒の手に渡して彼らから尊い神政政体を取り上げ給うた。

4) 力の象徴。母上二・一。詩九一・一一など参考照。5) ヘブレオ語本「おん右手を振りあげ、(打つため)」。

6) 聖殿。7) 聖歌を歌う所で敵がかちどきをあ

り。ハヘト。主は娘シオンの石垣を崩さんと思ひ立ち給い、その繩を張りて、⁸⁾破壊する事より御手を引き給わざりき。されば鹿砦は哀しみ、石垣⁹⁾は悉く崩れたり。テト。その門は地に埋もれたり。¹⁰⁾彼その門を毀ち碎き給えり。その王及びその諸侯は異邦人の間にあり、最早そこには律法なく、その預言者等の主より啓視を得たることなかりき。¹¹⁾ヨド。娘シオンの長老等は地に坐して黙し、その頭に灰を振りかけて毛衣を纏えり。イエルサレムの娘等はその頭を地に垂れたり。ニカフ。わが眼は涙に霞み、わが腹は九回し、わが肝¹²⁾は地に塗れたり、そは幼児や乳呑児が邑の街頭に絶え入りし時、わが民の娘の蹠蹠られたるが故なり。ニラメド。彼等傷つける者の如く邑の街頭にて絶え入るに方り、その母等の懷にて息絶ゆるに方り、その母等に云えり、小麦と葡萄酒と何処にかかる、と。ニメム。娘イエルサレムよ、我何にか汝を比えんや、また何にか汝を譬えんや。処女なる娘シオン

げた。—⁸⁾天主は御計画に従つて、言わば御前に張らせ給うた測り繩の通り、都の破壊を行ひ給う。¹⁰⁾要塞は二重の垣で囲まれてゐることがしばしばあつた。¹¹⁾王位は廢され、¹⁰⁾即ち破片の下に政体や司祭の秩序は破壊された。¹²⁾肝臓は元氣の源と考えられていた

よ、我何にか汝を擬えて、汝を慰めんや。實に汝の悲惨は海の如く大なり。誰か汝を医すことを得ん。^{一四}ヌン。汝の預言者等は汝の為に虚偽にして愚かなる事を見たり、¹³⁾されど汝の痛悔を喚起さん為に、汝の不義を發きたることなし。彼等が汝の為に見たるは、ただ虚偽の啓示と追放を招く事のみ。^{一五}サメク。路行く人々は皆汝に向かいて手を拍ち、娘イエルサレムに向かいて嘲り、また頭を振りて云えり、全地の歡喜たりし、かの完き美の邑とは是なるか、と。^{一六}フエ。汝の敵は悉く汝に向かいてその口を開き、嘲り、歯を咬み鳴らして云えり、我等呑まん。¹⁴⁾見よ、これ我等が待ち望みし日なり。我等之に会い、之を見たり、と。^{一七}アイン。主はその思い立ち給いし所をなし、その昔日より命じ給いし事¹⁵⁾を成就げ給えり、滅ぼして惜しむことなく、敵に汝を降す歡喜を味わわしめ、汝の仇の角を高くし給えり。¹⁶⁾一八サ

¹³⁾ 偽予言者らはただイエルサレムに對する救いと幸福だけを見たと称して（耶二三・一七）それにより御民の改心を妨げた。¹⁴⁾ヘブレオ語本「われらは呑みたり」。即ち都を破壊する時協力援助した。¹⁵⁾ブルガタ原語 sermonem suum 「その言葉」¹⁶⁾利二六・一四以下。申二八・一五

も滝涙の如く涙を流し給え、御躬に休息を与えず、また汝の御眼の瞳を
も休め給わざれ。¹⁷⁾ 一九コフ。汝夜には、夜警の初に起き出て讚美し、¹⁸⁾ 主
の御眼前に汝の心を水の如く打ちあけよ。彼に向かいて汝の双手を挙げ、
すべての街の頭に飢えて饑れたる汝の幼児等の命乞いをせよ。二〇レス。主
よ、照覽し給え、汝誰を葡萄の如くに摘み採り給えるか、¹⁹⁾ 熟々思ひめぐ
らし給え。豈女その生みし者なる、掌ばかりの幼児²⁰⁾ を啖うべけんや。司
祭および預言者、主の聖所において殺さるべけんや。ニシン。幼児も老人
も戸外の地上に臥し、わが処女等もわが若者等も剣に仆れたり。汝は御激
怒の日に彼等を殺し、之を討ち滅ぼして憐み給わざりき。ニタウ。汝は周
囲より我を脅す者等を、祝祭の日の如く招び集え給えり。主の御激怒の日
には遁れし者も残れる者もあらざりき。わが育て養いし人々は、敵之を滅
ぼし尽せり。

17) 耶一四・一
七。本一・一
六。一 18) ヘブ
レオ語本「(嘆
きの) 叫びを
あげ」。

19) 本一・二二
参照。 20) ヘ

ブレオ語本
「その抱き育
てし幼児」。

申二八・五三
以下参照。

第三章

哀歌三

第三章

1) 私が

逃れる

ことの

できな

いよう

磐の如

く。

一 アレフ。我は彼の御義憤の笞に逢いて慘ましき目を見る人なり。ニアレフ。
 彼が我を驅りて至らしめ給えるは、暗闇の中にして光明の中にあらず。三アレ
 フ。彼は終日ただ我に手向かい、また手向かい給えり。四ベト。彼はわが皮膚
 とわが肉とを老いしめ、わが骨を碎き給えり。五ベト。わが周囲に築きて我を
 囲むに、り 苦汁と辛酸とを以てし給えり。六ベト。我を恒久に死せる者等の如
 く、暗き処に置き給えり。セギメル。彼は周壁を築き我を沮みて、出るを得ざ
 らしめ、わが足枷を重くし給えり。八ギメル。剩えわが叫びて願う時と雖も、
 わが祈祷を斥け給えり。九ギメル。四角の切石もてわが道を閉塞し、わが径を
 崩し給えり。一〇ダレト。彼は我にとりて、待伏せする熊、隠れ潜む獅子の如く
 なり給えり。一ダレト。わが徑を崩し、我を打ち拉ぎ、我を荒ましめ給えり。
 二ダレト。御弓を引き絞り、我を御矢的となし給えり。二三ヘ。彼は御箭の

一四
娘等^{むすめら}もて、わが臂^{ひじ}を射ぬき給えり。一四へ。我^{われ}はわがすべての

民^{たみ}の嗤笑^{ものわらい}となり、その終日嘲り歌う所^ととなれり。一五へ。彼^{かれ}は我^{われ}

に苦^{にが}き数々^{かずかず}を満たし、我^{われ}を苦艾^{3) に}飽かしめ給えり。一六ワフ。

彼^{かれ}は順次^{つきつき}にわが歯^はを碎^{くだ}きて、我^{われ}に灰^{はい}を食わしめ給えり。⁴⁾一七ワフ。わが靈魂^{たまし}すなわち平安^{へいあん}を奪^{うば}われ、我^{われ}幸福^{わく}を忘れたり。⁵⁾

一八ワフ。されば我^{われ}云えらく、わが目的^{もくてき}、わが主^{しゆ}に繋けたる希望^{のぞみ}

は失せたり、と。一九ザイン。わが淺間^{あさま}しさとわが過失^{あやまち}、苦艾^{にがよもぎ}と

胆汁^{にがしる}とを御心^{みこころ}に留め給え。二〇ザイン。我^{われ}そを思い出で思^{おも}い返さ

んに、わが靈^{れい}わが胸裡^{うち}にて衰えん。二一ザイン。我^{われ}是等^{これら}の事をわ

が心^{こころ}に思^{おも}いめぐらし、是^{これ}によりて希望^{のぞみ}を抱^{いだ}かん。二二ヘト。我^{われ}等^ら

の滅^{ほろ}び尽^{つく}ざざるは、主^{しゆ}の御慈悲^{おんじ}の賜物^{たまもの}にして、その御憐憫^{おんあわれみ}の絶^た

えざるによるなり。二三ヘト。朝毎^{あさごと}に新^{あらた}にして、偉大^{おおい}なるかな

汝^{なんじ}の信^{まこと}実。二四ヘト。わが靈魂^{たま}の云えらく、主^{しゆ}こそわが分^{ぶん}なれ、

二四

三三

三〇

一九

一八

一七

一六

一五

2) 「矢」を意味する詩的な言い方。百四一・二〇など参照。一三耶九・一五参照。一四ヘブレオ語

本は「砂利もてわが歯を碎き、灰もて我をおおい給えり」。一五もうよくなる見込がない。一六ブルガタの novi は男性複数の語で文法上誤訳らしいある人々はこれを前節の miserationes に関するものとして novae と考え、ある人々はこの訳の如く本節の fides に関するものとして nova と考える

7) 詩一五・五参照。

故に我彼を待ち望まん。三五テト。主は己に希望を置く人々、己を求むる靈魂に仁慈深く在す。三六テト。黙して天主の御救濟を待ち望むこそ善けれ。三七テト。人にとりては、その少時より輒を負えるぞ善き。三八ヨド。そは自ら己が身に負いたるなれば、獨り坐して黙すべし。三九ヨド。己が口を塵に埋むべし、⁸⁾或は希望あらんか。三〇ヨド。己を打つ者に頬を向け、飽くまで恥辱を受くべし。

三一カフ。蓋は主永久には棄て給わざるべければなり。三二カフ。蓋したとい棄て給えりとするも、その御慈悲の豊かなるに由りて、御憐憫を垂れ給わん。三三カフ。即ち心より人の子等を辱しめ、且棄て給えるにはあらざるなり。三四ラメド。地の諸々の捕虜等を足の下に蹂躪ること、三五ラメド。至高者の御顔の前にて、人の道理を枉ぐること、三六ラメド。人を裁くに當りて之に邪曲をなすこと、是等は主の知り給わざる所なり。三七メム。主命じ給わざとせば、成れと云いたるその者は誰ぞや。⁹⁾ 三八メム。禍にもあれ、福にもあれ、¹⁰⁾ 至高者の御口より出でざるあらんや。三九メム。人己が罪の為なるを、人生ける間何ぞ呴けるや。¹¹⁾

8) へり
くだり
地上に
ひれ伏して、
塵に接吻する
・六。
9) 穢三
10) 罰と
しての不¹⁰⁾
幸、報賞と
しての幸福。
11) 人間
にとつて罪よ

四〇ヌン。我等いざ己われらが道みちを探たずね求もとめて、主しゆの御許みもとに立ち帰かえらん。四一ヌン。
 いざ天てんに在す主しゆに向かいて、我等の心こころを手ともと共に挙あげん。四二ヌン。我等は
 非ひを行おこないて、御忿怒おんいかりを招まねきたり。是によりて汝汝願いを容れ給たまわざるなり。
 四三サメク。汝なんじ御激怒おんいかりの時に御躬おんみを蔽おおい隠かくし、我等を打ち殺うして、惜おしみ
 給たまわざりき。四四サメク。祈祷いのりを通とおさじとて、汝なんじの御前まえに雲くもを置おき給たまえり。
 四五サメク。民たみの中なかにて我われを引抜ひきぬかれたる草くさ、棄すてられたる塵芥ごみの如くにな
 し給たまえり。四五フエ。敵てきは皆我等みなわれらに向むかいてその口くちを開ひらきたり。四七フエ。
 預言よげんは我等われらの為ために、恐怖おそれとなり、係蹄わなとなり、破滅ほろびとなれり。四八フエ。
 わが民たみの娘むすめの蹂躪ゆみにじられたるに由りて、わが眼淚なみだの川かわを流ながせり。四九アイン。
 わが眼め悲かなしみて息息まざるは、安やすきを得みること絶たえてなかりしが故ゆえにして、
 吾吾アイン。そは主しゆが天てんより顧かえりみ、照覽みそなわし給たまうまでなりき。五アイン。わが
 邑まちのすべての娘むすめたち等ゆえに、わが眼めわが靈魂たまの力を奪うばいたり。¹⁴⁾五二サデ。わ
 が敵てきは故ゆえもなく我われを鳥とりの如ごとくに追おいて捕とえたり。五三サデ。わが生命いのち、坑あなに

りも嘆なげかわし
 いものがほか
 にあらうか。
 参照。——
 12)本ニ・一六
 予言者よげんしゃの。
 13)偽よせ
 14)苦痛くどうは強盜こうとう
 のようよに、私
 の魂たま、私の生
 气き、私の元氣
 を奪うばつてしま
 つた。

陷りたるに、彼等わが上に石を置きたり。¹⁵⁾ 五四サデ。水わが頭の上に溢れ張れり、我は云いぬ、我亡びたり、と。五五コフ。我坑の底より、主よ、汝の御名を呼び奉れり。五六コフ。汝わが声を聞き給えり、わが嗟嘆と号叫とに御耳を背け給うなれ。五七コフ。わが汝を呼び奉りし日に、汝近づきて曰いけり、汝恐るることなれ、と。¹⁶⁾ 五八レス。わが生命の贖主なる主よ、汝はわが靈魂の訴訟を審理し給えり。五九レス。主よ、汝は彼等の我に加えし不義を見給えり、わが訴訟を裁き給え。六〇レス。汝は彼等の怒りをすべて照覽し、その我に仇なす企図を悉く見給えり。六一シン。主よ、汝は聽き給えり。彼等の罵詈を、その我に仇なす一切の企図を。六二シン。その我に立逆らう者等の唇を、またその終日我に対して廻らす策謀を。六三シン。視よ、彼等は坐するも立つも、我をその嘲りの的となすなり。六四タウ。主よ、汝は彼等の手の所為に応じて、之に報をなし給わん。六五タウ。汝は彼等の心に楯¹⁷⁾を置き、彼等を責め給わ

15) ヘブレオ語本「彼らはわが命を穴の中に滅ぼしたり」。創三七・二四以下ヨゼフの話を参照

16) 耶三〇・一。四六・二七、二八。17) ヘブレオ語本「心のおおい」。即ち盲目、

頑冥。

ん。¹⁸⁾ 六六タウ。御激怒もて彼等を追い、之を天下より滅ぼし去り給わん、主よ。

第四章

哀歌四

一 アレフ。如何にして金は曇り、その最美しき色は変り、聖所の石はあらゆる街の頭に¹⁾投げ散らされたるぞ。二ベト。世に聞えたる、純金を衣しシオンの子等は、如何にして陶師の手に成れる土器と見做されたるぞ。三ギメル。血を吸う魔女²⁾と雖も、乳房を露して、その子等に乳を哺ませたり。さるをわが民の娘は、酷きこと荒野なる駝鳥の如し。³⁾四ダレト。乳呑児の舌は渴きて口蓋に固く着けり、幼児等はパンを請い求めたれど、之に裂き与うる者なかりき。五ヘ。美味を食したりし者も巣に巣れ、黄金色の衣着て育てられし者⁴⁾も糞土を抱けり。六ワフ。わが民の娘の不義は、人手にからずして瞬く間に滅ぼ

第四章 1) ヴルガ
タ in capite 即ち
街路の口に。

2) ヘブレオ語本

「山犬」。¹⁾駝鳥は自分のうんだ卵を沙漠の砂のなかに入れておく。百三九・一五参照。

4) ヘブレオ語本

「紅の衣着たる者」

¹⁸⁾ ヘブレオ語本
「彼らに対する汝の呪い」。

七
されたるソドマの罪よりも大となれり。⁵⁾ ゼザイン。そのナザレ人等⁶⁾
は雪よりも輝き、乳よりも光沢あり、古代の象牙よりも紅く、青玉よ
りも美しかりき。八ヘト。されど今や彼等の顔は炭よりも黒く、巻に
出ても見識られず、その皮膚は骨につき、萎縮びて枯木の如くなれ
り。九テト。剣に仆れし者は、飢えて死したる者よりもさいわいなり。
そはかかる人々は、地に穢れる物なきに由り、衰え行きて終に力尽き
たればなり。一〇ヨド。心やさしき女等の手も己が子等を煮たり、是は
わが民の娘の滅亡の時に彼等の食物となりたるなり。ニカフ。主はそ
の御憤激を晴らし、侮られたる御怒を注ぎ、シオンに火を放ちてその
基を焼き尽し給えり。⁷⁾ 一二ラメド。地の王等も、世の万民も、仇や敵
ム。然るにその中にて義人等の血を流したるは、その預言者等の罪と
その司祭等の不義とに由るなり。⁸⁾ 三四ヌン。彼等は盲いて、街衢を行

5) ソドマは一瞬の間に滅びたので、その住民はイエルサレム市民よりも苦しむことが少なかつた。創一九・二一以下参照。

6) 彼らの中の選まれた者、殊に名譽や地位ある人々。

7) 本二・三参照。

8) 偽予言者や司祭達はマナツセの中の殺戮と敵の悪意とを助けたようなもの。一の情欲に目がくらんで。

徨えるが、その身は血に汚れたり。彼等詮方なくして、¹⁰⁾己が裳
裾を掲げぬ。¹¹⁾サメク。人々は彼等に向かいて叫べり、汚れたる
者よ、¹¹⁾退け。退き去りて、触ることなけれ、と。かく彼等叱
咤せられて遂に払わるれば、異邦人の間においても人々は云えり、
最早彼等の間には住むべからず、と。¹¹⁾フェ。主御面もて彼等を
分散せしめ給えり、最早之を眷み給うことなからん。人々も司祭
等の面を尊ばず、長老等を憐まざりき。¹¹⁾アイン。我等のなお立
てりし間、我等の眼は我等に対する援助を空しく望みて衰えた
り。さるを我等は救う能力もなき国民を待ち望み居たりしなり。¹²⁾
一八サデ。我等が街を歩む時、我等の足は滑りたり。我等の終末は
近づき来る。我等の日数満ちたり、實に我等の終末来れり。¹³⁾コ
フ。我等の追手は空の鷺よりも速く、山の上にて我等を追い、荒
野の中にて我等を待伏したりき。¹³⁾レス。我等の口の氣息なる、

10)自分の衣服に人がさ
わることのないよう

11)これは癩病者に与え
られた名前。利一三。

二五参照。12)包囲攻

撃の終るまで、ユデア
人はエジプト軍が救い
に來てくれるだろうと

宛てにしていた。耶三
七・五など参照。

13)イエレミアは都陥落
後逃亡したセデキア王
の捕らわれ引かれたこ
とを暗に言つてゐる。

耶五二・七以下参照。

主キリスト¹⁴⁾は、我等の罪ゆえに捕われ給えり。我等之に向かいて云いぬ、我等異邦人等の間にありても、汝の御蔭を頼みて生きん、と。ニシン。汝フスの地に住む娘エドム

よ、喜び樂しめ。¹⁵⁾かの杯は汝の許にも至らん、汝も酔い痴れて、裸となるべし。¹⁶⁾ミタウ。娘シオンよ、汝の不義は償われたり。彼最早汝を捕え移し給うことあらじ。娘エドムよ、彼汝の不義に報い、汝の罪を曝き給えり。

¹⁴⁾ヘブレオ語本「ヤーヴエに注油せられたる者」。神政政体の国王に与えられた別名。¹⁵⁾エドム人はイエルサレム陥落を喜んだ。それでイエレミアは「さあ喜べ、しかし汝の喜びは長く続くまい」と皮肉つて言うのである。¹⁶⁾満身これ恥辱という有様になるだろう。

第五章

預言者イエレミアの祈禱

一主よ、我等に起りたる事を思い出で給え。我等の恥辱を照覧し、顧み給え。¹⁾我等の嗣産¹⁾は他国の者の手に、我等の家は外国の者の手に、移れり。²⁾我等は父を失いて孤児となり、我等の母は寡婦の如くなれり。²⁾四我等は金錢を

第五章 1)わが国。1)2)男の人達が捕虜として引き去られたので、女子供は寡婦孤児のようになり、自然の保護者扶助者を失つた。

出して己が水を飲み、代価を支払いて己が薪を求めたり。³⁾ 五人
々我等に駆かけて追立て、疲れても休むことを許さざりき。

六我等はパンに飽かんとて、エジプトとアッシリア人と手を
差伸べたり。⁴⁾ 七我等の父祖は罪を犯して、最早あらず、我等は
彼等の罪を負えり。八臣僕等⁵⁾ 主人顔して我等を虐げたれど、
我等をその手より贖い救う者なかりき。九我等荒野の剣⁶⁾ に面
し、命がけにて我等のパンを取り来りぬ。一〇饑饉の大嵐の面い
来るところ、我等の皮膚は焦⁷⁾の如く灼けたり。二人タシオンに
ては女等を、またユダの諸市にては処女等を凌辱しめにき。
三諸侯は手によりて吊るされたり、人々はまた長老等⁸⁾ の面
をも尊ばざりき。三彼等は濫に若者等を酷使えり、少年等は薪
を担いて崩折れ倒れたり。四長老等は門の辺を、若者等は琴
弾く群を、去れり。五我等の心の喜悦は失せたり、我等の輪舞

³⁾ 敵が井戸や森林を占領してしまつたので、以前ただであつたものを、今は買わなければならなくなつた。一〇食糧の放出を願うために。一五アッシリア王の家來たち。

六兜器を持つた強盜ども

七「敵の手によりて」と解する人もあり「おのが手を」と解する人もある

八諸侯および役人達。

九賦役。

一六 は哀悼に変れり。^{十六} 冠¹⁰⁾は我等の頭より落ちたり。我等は禍なるか
 一七 な、そは罪を犯したればなり。^{十七} この故に我等の心、悲哀に満ち、
 一八 是によりて我等の眼冥くなれり。^{十八} シオンの山の荒れ果てたる故
 一九 に、狐その上を歩めり。^{十九} されど主よ、汝は永遠に在し、汝の玉座
 二〇 は千代万代に及ぶべし。^{二十} 汝いかなればいつまでも我等を忘れ、日
 久しく我等を棄ておかんとし給うや。^{二十一} 主よ、我等をして汝の御許
 三 に立ち帰らしめ給え、さらば我等立ち帰らん。我等の日を新たにし
 て、原始の如くならしめ給え。^{二十二} 然れども汝は我等を見棄て斥け
 給えり、汝は我等に對して太く怒り在すなり。^{二十三}

¹⁰⁾ われらの名譽幸福
¹¹⁾ 天主がわれらの父祖の持つていたよ
 な力を与えて下さる
 ように！¹²⁾ ヘブレ
 オ語本によれば、こ
 れは事実ではなく、
 単なる推量に過ぎな
 い。